

山形県現代俳句協会会報

第33号
令和7年12月

俳句をつくるという意味

山形県現代俳句協会事務局長 佐竹伸一

直観と眼のはたらきによって俳句はつくられる。直観と眼のはたらき方には、高低や深淺や強弱や鋭鈍があり、柔らかさと固さ、豊かさと貧しさがある。それぞれ前者を目指すとなれば俳句は難しく、後者でよしとすれば俳句はやさしい。

俳句は日常の一瞬を十七音で切り取る詩である。人生には山あり谷ありで波乱の時が少なからずあるとは言え、日々の暮らしは概ね只事の連続であり、平凡な営みが繰り返されると言つてよい。こうした日々の只事を、鈍い直観と浅薄な眼で句にすれば、真正正銘のつまらない只事俳句ができあがる。一方、只事のようなあるいは只事に見える日々の暮らしや風土と言え、鋭い洞察力と高い精神性があれば、只事の中には無限の詩が隠されていると言つてよいだろう。

確かに、俳句を含め全ての表現は、順風満帆な時よりも、悲しい時や取り戻せない欠落がある時にこそ必要とされ、そのような時には人の心を打つ佳句は生まれやすい。しかし、人はいつまでも悲しみを追いかけてはいけない。悲しみを乗り越えて、日常をより良く生きていかなければならない。人は多少の差こそあれ、誰もが悲しみを背負いながら生きていく。前を向き気高く生きる日々の暮らしは、一見只事のように見えても、実は只事の世界ではないのである。

私は学生時代から地質学を学んできた。見ることと見えることの違いを教えてくださった恩師は、露頭（地層）を見抜く知見がなければ、それらは何も語ってはくれないから様々な観点から考察するのだと話されていた。このことは、俳句にも当てはまる。表面には現れてこない奥底に隠れたものを見

抜く眼力がなければ、対象の本質は見えないままなのである。同様に直観とは、知見であり経験であり学識であり、日々の研鑽があつてこそはたらくものであると理解してよいだろう。また、この直観というものは、単に俳句のみを学べば深くなるというものではなく、様々なジャンルへの造詣の深さを根幹としてより確かなと言つてよいだろう。

しかし、こうした俳句の直観や眼のはたらきは、学ぶことだけで身に付くものではないのではないだろうか。俳人の俳人は人に非ずと書く。自分に非ずとは、自分以外のものに変わるということである。これは自分以外のものの気持ちかわかるとのこと。つまり、人としてのやさしさがあつて自然と備わるものではないのだろうか。俳句は、眼前を直覚し「いま」「ここ」に「われ」を置く詩であるが、この「われ」とは自我に凝り固まった「われ」ではなく、身の回りの自然や人々に心を寄せる「大愛」をもった「われ」だと思つていく。

読み手の心を震わすような句を作りたいという人がいる一方で、単に句作を楽しめればそれでよいのだという人や、句会後の懇親の場が楽しみでという方も少なくはないだろう。俳句に求めるものは人様々。いろいろな俳句やいろいろな楽しみ方があつてよいし、その方がむしろ自然である。しかし、たかが俳句されど俳句である。俳句を志した以上、後世まで人口に膾炙するような句を、一生の内に一句ぐらいはものにしたいと願うのである。

俳句をつくることは、日常の流れの中で曖昧になつて見失いがちな自分を取り戻しクリアにしていくこともある。俳句に支えられながら日々を乗り越えて行こうとする意志とも言えるだろう。山形の大地に根を張り、この地に生きている生かされている魂の叫びを十七音で詠い続けていきたい。

現代俳句の秀句を読む 10

雪降り時間束の降ることく

石田波郷

掲句に出会つたのは、子育てに奮闘していた頃だったと思う。新聞で読んだのか雑誌に掲載されていたのか全く覚えていない。

只、ブラックホールに吸い込まれるような時間の外側へ放り出されてしまったかのような不思議な感覚が頭から離れなかった。

俳句が写生を大事にする理由は何だろう。それは極少の文字で作者の思いを伝達するための手段だからであろう。では掲句は写生句であるかという点、違ふ。写生を超えて心象風景を前面に出し、それが読み手にも素直に共感できる域に入つた句といえよう。

「雪が降る」でも「雪降るや」でもなく「雪降り」という叙情的な措辞と「時間の束」が激しく降る雪のスピードや雪の量を彷彿させる。雪という物理的な現象を通じて、形の無い時間を可視化し一つ一つの雪片が過ぎ去っていく一瞬一瞬の象徴のように感じられる。

昭和四十三年に刊行された第七句集「酒中花」の中の一句。五十六歳で亡くなる二年前の入院中の作とある。雪に託された掲句の時間は生への希求でもあり命の持ち時間だったのかもしれない。

(松田佳津江)

県現代俳句協会吟行会

◇令和七年十一月八日（土）

本山慈恩寺・慈恩寺テラス
寒河江市ハートフルセンター

現代俳句協会中村和弘特別顧問をお迎えし、十名が参加。小春日の中充実した時間を過ごした。

- 1 ③慈恩寺の手水に冬の始めかな 大類つとむ
- 2 ④野ぶどうの坂道とところ山門へ 瀬野 史
- 3 ③仁王坂怒髪を天に惹焔 堀 尚子
- 4 ③枯菊の枯れきるまでを支へ合ふ 松田佳津江
- 5 ②刈田奥雁戸山双耳は風の道 高橋 エミ
- 6 ②ふと笑ふ十二神将冬うつら 佐竹 伸一
- 7 初冬の光こぼれて仁王坂 井上 康子
- 8 尻太き擦れ違い行く秋茜 松浦 廣江
- 9 ⑤金色の波裏羅の目有り冬の闇 中村 和弘
- 10 ①御山雪です佛の里の熊注意 畠山カツ子
- 11 ③冬木の芽あれこれ見分け仁王坂 阿部 雅子
- 12 ④黄落に向く端つこの仏たち 大類つとむ
- 13 ②朱唇なまめく弥勒菩薩や梅もどき 瀬野 史
- 14 ①慈恩寺や鐘つく人と冬の蝶 堀 尚子
- 15 ①十二神将熊出沒に槍を向け 松田佳津江
- 16 ⑨冬近し仁王の脛の脈荒し 高橋 エミ
- 17 ①菊揺れて持国多聞の黒光 佐竹 伸一
- 18 落葉踏み十二神将に会ひに行く 井上 康子
- 19 晩秋や本性を絶つ梵鐘を打つ 松浦 廣江

- 20 ①立錫の切株白し冬に入る 中村 和弘
- 21 ①澁刺と十二神将冬陽中 畠山カツ子
- 22 よみがえる令和の茅葺き冬の寺 阿部 雅子
- 23 ⑤秋雲のゆく慈恩寺の案内図 大類つとむ
- 24 宝輪と競う杉の秀秋の空 瀬野 史
- 25 ②薬師如来紅花色の唇を持つ 堀 尚子
- 26 ③いつ来ても落葉湿りの薬師堂 松田佳津江
- 27 ①鐘声や風鐸の揺れ秋うらら 高橋 エミ
- 28 ②薄明り集う光背冬に入る 佐竹 伸一
- 29 吟行会熊よ穴へと願ひつつ 井上 康子
- 30 ②立冬や母に捧げる香一本 松浦 廣江
- 31 ③冬キヤベツ隆々として慈恩かな 中村 和弘
- 32 ①初冬の陽浴びて和やか御前仏 畠山カツ子
- 33 姫子松ふんだんに生かす冬秘仏 阿部 雅子

※ゴシック体は特選句です。

※○の中の数字は、特選二点、並選一点とし、十一名の選による合計点数です。

- ・中村和弘 特選5 並選 10・12・15・23
- 〈県会員選は特選句のみ。並選句記載は省略〉
- ・阿部雅子・畠山カツ子・松浦廣江 特選16
- ・佐竹伸一・松田佳津江 特選9
- ・井上康子 特選2
- ・瀬野 史 特選3
- ・大類つとむ 特選4
- ・堀 尚子 特選6
- ・高橋エミ 特選26

【中村和弘特別顧問の講評から】

◇吟行会での作句について

＊不完全でもよいから、吟行の場で五七五にまとめ記録すること。後から作ろうと思っても作れなくなる。

◇句作全般について

＊自分の好きなもの。例えば歳時記の動物、植物等々、誰にも負けない領域を持つこと。
＊今を詠むことが一番強い。

今しか詠めない句がある。今日の投句の中に熊を詠んだ句があったが、熊の出沒が相次いでいる今年だからこそ作れる句である。そういう句が一番強い。今しか詠めない句に挑戦してほしい。

＊沢山詠んで自信をつけること。
＊物をよく見ること。

例えば、十二神将とひとまとめにせず、一つの仏像をよく見ること。十二神将の中で、自分ほどの神将が好きなのかを考えて選び出し作句すること。

＊一句のどこに重点があるのかを、はっきりさせること。

＊避けるべきこと

・つき過ぎ・類想・当たり前・散文的

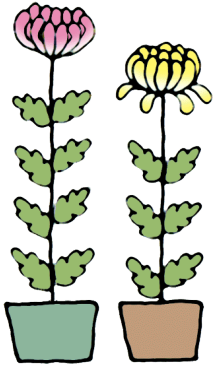


【吟行会に参加して】

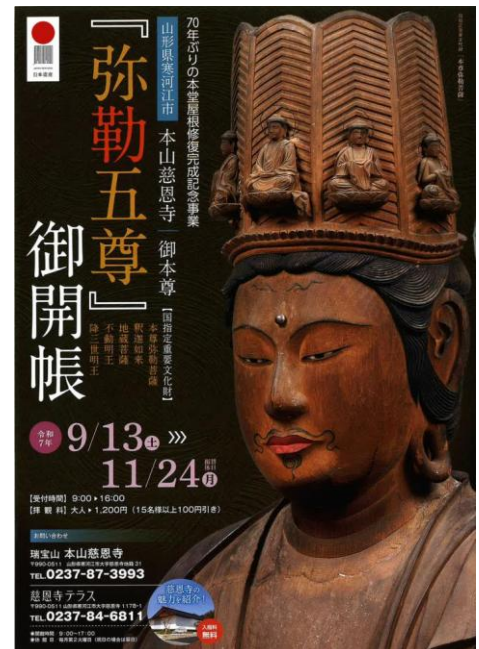
高橋エミ

十一月八日、中村和弘先生をお迎えしての吟行会に参加。今年入会したばかりの私には初対面の方々が多く緊張の吟行会。雁戸山には仁王坂からと村山市からでは山容の違いが面白い。仁王坂下からのゆったりとした話し声が吟行会の雰囲気。新しく葺き替えた本堂の大屋根。御開帳の秘仏達。薬師堂の十二神将の迫力。思い切り鐘を撞いた鐘楼。茅葺屋根に生えた雑草。花の終わった彼岸花の葉の緑。それ等をどう詠むか悶々としているうちに三句出しの句会が始まる。一句一句に中村先生の丁寧な講評。「近すぎ」「十二神将を一まとめにしない」。出沒盛んな熊を詠んだ句もあり「今、起きている事を詠んだ句は強い」等々。具体的な講評は飽きる事なく瞬く間に時間が過ぎる。

庄内の皆さん。遠い所お疲れ様でした。楽しい出会いを「もったけだの！」



撮影前、大類会長に急用が出て全員揃わず。10名での記念撮影。



70年ぶりの御開帳に合わせ、本山慈恩寺で吟行を行いました。



見ごろの紅葉と鐘楼。時々鐘の音が聞こえました。一人3回撞いてよいそうです。



慈恩寺での吟行を終え、慈恩寺テラスで昼食。その後、寒河江ハートフルセンターに移動しました。写真は、締切の時間が迫り、必死で句帳とにらめっこしていた時のもの。吟行会ならではのこの緊張感がたまりません。しっかり充電できた一日でした。

会・員・近・詠

吟行会に参加できなかった方から
作品を寄せていただきました。



- 1 新涼や自分のための一句得て うにがわえりも
- 2 月光を吸うて橡の実まろまろと "
- 3 橡の実はずませ地球は上機嫌 "
- 4 檜扇の実黒き光沢つづらなり 梅木 啓子
- 5 一人居や玄関の花は桜蓼 "
- 6 弟に父の背を見て秋深し "
- 7 青空のてるてる坊主秋の朝 大泉 秀明
- 8 雲間より光を集め芋煮会 "
- 9 十月やイベント続き警備立つ "
- 10 彼岸花消えて此岸にただひとり 大志田雄志
- 11 老いてゆくことのみ確か秋の声 "
- 12 良書より悪書が好きで天高し "
- 13 大小屋を遠巻きにせし蟻の道 柏崎 青波
- 14 秋日和舐めてとがらす木綿糸 "
- 15 プラム酒より薄き血潮で恋をする "
- 16 コンバインパワー全開豊の秋 木嶋 玲子
- 17 境内のラジオ体操小鳥来る "
- 18 人生の加減乗除や後の月 "

原稿募集

巻頭や「現代俳句の秀句を読む」等に、
掲載を希望される方がおられましたら、
事務局までご連絡ください。

- 19 丈も幅も立派な秋刀魚皿おどる 黒谷博楽子
- 20 新米の瑞穂の国に古米食う "
- 21 ぐいぐいとギア換えとんぼ草の上 "
- 22 月山に大きな雲や昼の虫 小林 政女
- 23 倒壊の家に朝顔咲きほこる "
- 24 林業のウルトラ重機鯛雲 "
- 25 秋めくやカレーうどんの具はうどん 滝口 然
- 26 秋の日を大きく返しビート板 "
- 27 舌出してなおほえつかざる冬の犬 "
- 28 寺までの山路装うや初紅葉 東海林光代
- 29 創造のちから直球で来る秋の展 "
- 30 ノーベル賞受賞の言葉の重さ秋開ける "
- 31 柄の失せし鍋捨てられず昼の虫 津田よね子
- 32 焼き林檎ほどよく焼けし三時かな "
- 33 象潟や九十九島は初時雨 "
- 34 白露や境内の小石みな佛 渡辺竹女
- 35 紺碧の宙に涼しき三重の塔 "
- 36 法の灯の百の揺らぎやちろ鳴く "

編集後記

◇木から造られる物は多々あるが仏になる
木は特別である。造る技術も人材もその木
に引き寄せられるようであった。手が勝手に
動くように見えたものだ。だからこそ心が
洗われ、自然に手を合わせるのかもしれない。
松浦廣江

◇本山慈恩寺での吟行会。風はあったもの
の、小春日の温かな日差しに恵まれ穏やか
な時を過ごした。初めての方と久しぶりの
方もおられたが、皆旧知の仲のように睦ま
じく笑顔溢れる吟行となった。ご指導くだ
さった中村和弘先生と、お心遣いを寄せて
くださった監事の柏崎青波様に、心より感
謝申し上げます。佐竹伸一

◇今年も残り少なくなりました。俳句を通
して会員の皆様と繋がっていると思うと、
何かあたたかい気持ちになります。実際に
顔を合わせて句会をすれば一層楽しいと思
います。できるだけ多くの方に参加して頂
けたら嬉しいです。堀 尚子

会報 33号 令和七年十二月発行

発行人 大類つとむ

発行所 山形県現代俳句協会

〒九九七-四二二七

尾花沢市中町五-二〇

〒九九〇-一五五二

朝日町常盤に五二-一

事務局 佐竹伸一